



## 1-1 新センターの目指す姿

- 研究所併設の強みも生かした、全国トップクラスの周産期・小児の高度医療・研究機関
- 府域の医療ニーズに応じ、地域機関と連携して幅広い周産期・小児診療・母子保健の充実

## 1-2 新センターの役割

現在の当センターの機能を継続し、さらに充実させる（参考①～④）  
南大阪地域での周産期・小児医療の基幹施設としての機能を引き続き維持

### 周産期医療

- 府内随一の総合周産期母子医療センター
  - (1) ハイリスク妊産婦（ローリスクの妊産婦も積極的に）
  - (2) 低出生体重児等ハイリスクな新生児
  - (3) 母体・新生児救急搬送の基幹施設

### 小児医療

- 小児中核病院として高度な小児医療の提供
  - (1) 小児希少・難治性疾患に対する高度専門的医療
  - (2) 幅広い小児の内科・外科的疾患に対する高度な医療
  - (3) 小児救急 (4) 在宅・移行期医療

### 研究所

- 周産期・小児に関する疾病の原因解明や治療法の開発研究

## 1-3 拡充すべき機能

#### 診療機能

- ・ 感染症対策（個室整備）
- ・ 災害医療
- ・ リハビリテーション
- ・ ICTの活用

#### 患者サービス

- ・ 個室整備
- ・ 子育てサポート
- ・ ICTの活用

#### 社会的ハイリスク患者への支援

- ・ 産後ケアサービス
- ・ 虐待予防・対応

#### 働きやすい職場環境

- ・ 演習室・会議室等の教育研修設備

## 2 建替えの必要性

- 施設・設備の老朽化と過大な維持管理コスト（開院から40年が経過）（参考⑤）
- 特にNICUなど、医療機能の高度化に対し施設が狭隘（参考⑤）
- 患者ニーズに応えられない建物構造（個室の不足）

## 3 病院規模（病床数）および診療科

患者数分析から算出した2030年度時点病床数を稼働90%で運用⇒約300床（現状稼働病床数343床）

○周産期部門・・・据え置き（分娩数増で増床の可能性あり（参考⑥））

○小児部門・・・周辺地域から患者が来院する疾病は人口動態による減少を考慮：約180床

※病床数については、いったん約300床とするが、引き続き検討していく。

※診療科については、現時点で確定した変更予定は無いが、将来的には新設や変更の可能性あり

## 4 施設整備計画の概要

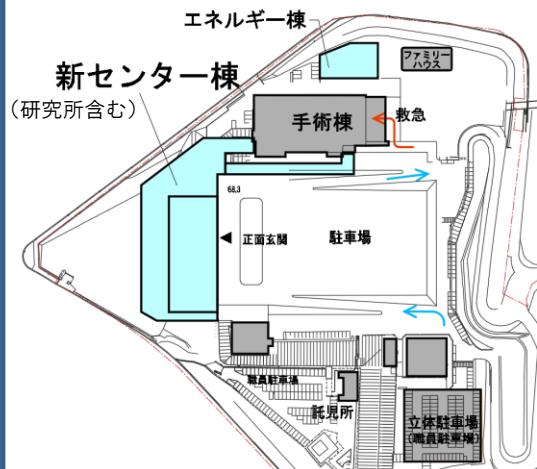
（現在の手術棟は引き続き活用）

部門	内容
外来	・ 感染症外来を新設（専用エレベーターを設置し、感染対応の病室を各フロアに整備） ・ 動線を考慮した効率的な配置（小児と母性を異なる階層に集約）
病棟	・ NICU、GCU、分娩部の拡充 ・ 個室化の促進（母性棟全室個室化、小児棟個室率 約43%）※現行個室率 19.5%
その他	・ 医療ニーズの変化に応じて、柔軟に運用やレイアウトを変更できるフロア設計 ・ 大規模災害・パンデミック対策機能の充実
研究所	・ 動物飼育室、培養室の拡充 ・ バイオセーフティレベル2、2A実験を行う感染管理区域の整備

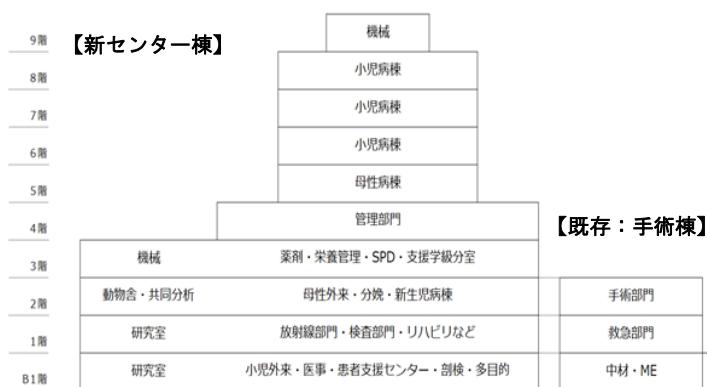
## 5 建設計画

※小児病院は成人病院に比べ1床あたりの面積を広くする必要あり（参考⑦・⑧）

(1) 建物配置（イメージ）



(2) 建物断面（イメージ）



(3) 整備規模

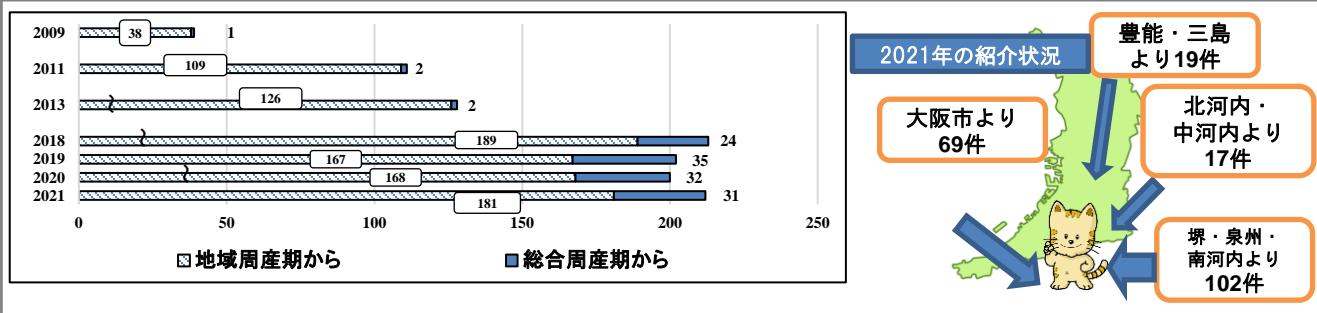
項目	内容
延床面積	約36,567㎡ （研究所含む。ただし、既存の手術棟・ファミリーハウス等約 8,000㎡及び付属設備は含まず）

## 6 整備手法及びスケジュール

○整備手法 ⇒事業者への創意工夫の促しやすさ、整備スケジュールの早期化、建設コスト縮減などの観点から、デザインビルド方式とする。

○スケジュール⇒2023年度：基本設計、2024～25年度：実施設計、2025～29年度：工事、2030～31度：解体工事・外構整備⇒**2029年度（R11年度）中の開院を目指す**

①. 他の周産期センターから重篤な妊産婦を多数受け入れ(府内の周産期医療最後の砦)



②. 府内で最多の低出生体重児を受け入れ(2020年度実績)

		~999g	1,000~1,499g未満	1,500~1,999g未満	2,000~2,499g未満
大阪府 総数 (2020年度 人口動態調査)	61,871	173	231	712	4,382
総合周産期母子医療センター 合計	件数 133 比率 76.9%	133	133	297	589
大阪母子医療センター	件数 42 比率 24.3%	42	37	65	71
A病院	件数 40 比率 23.1%	40	27	67	154
B病院	件数 4 比率 2.3%	4	18	48	144
C病院	件数 24 比率 13.9%	24	23	47	118
D病院	件数 23 比率 13.3%	23	20	46	74
E病院	件数 0 比率 0.0%	0	8	24	28

↓超低出生体重児 (出生時390g)



⑤. 現在のNICUは狭く、老朽化が進む



NICUの面積 (ともに21床)  
・兵庫こども: 542.2 m<sup>2</sup>  
・当センター: 229.3 m<sup>2</sup>

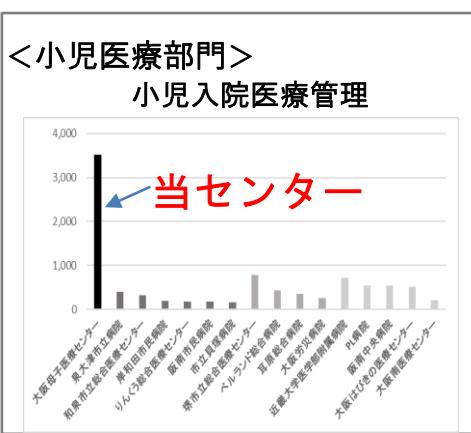
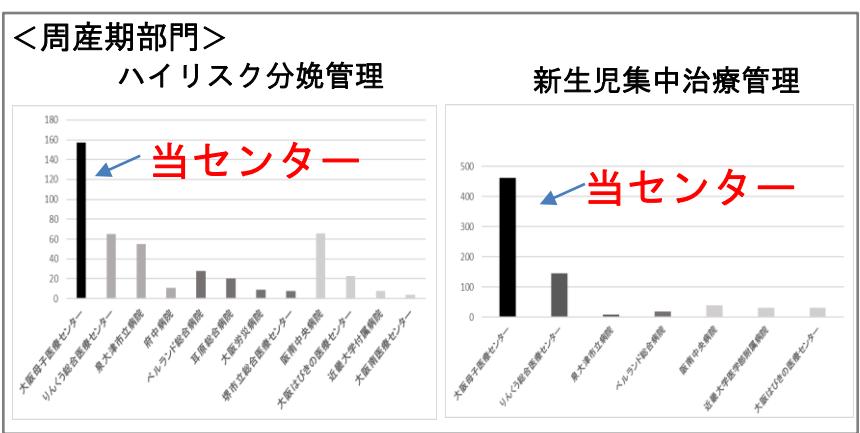


配管からの漏水で天井材が落下

③. 多くの難治性小児疾患の受け入れは府内トップ (2021年度実績)

診断分類名称	1位		2位		3位	
	施設名	症例数 シェア	施設名	症例数 シェア	施設名	症例数 シェア
手足先天性疾患	大阪母子医療センター	144 53.7%	D病院	58 21.6%	J病院	20 7.5%
脳、脊髄の先天異常	大阪母子医療センター	132 46.8%	E病院	38 13.5%	D病院	28 9.9%
先天性下部尿路疾患	大阪母子医療センター	53 53.5%	D病院	46 46.5%	-	-
骨軟骨先天性形成異常	大阪母子医療センター	49 41.2%	E病院	42 35.3%	I病院	18 15.1%
頭蓋、顔面骨の先天異常	大阪母子医療センター	27 50.9%	D病院	26 49.1%	-	-
先天性水腎症、先天性上部尿路疾患	大阪母子医療センター	26 72.2%	D病院	10 27.8%	-	-
先天性耳瘻孔、副耳	大阪母子医療センター	20 66.7%	D病院	10 33.3%	-	-
直腸肛門奇形、ヒルシュスプルング病	大阪母子医療センター	13 100.0%	-	-	-	-
腸管の先天異常	大阪母子医療センター	12 100.0%	-	-	-	-
股関節先天性疾患、大腿骨先天性疾患	大阪母子医療センター	11 100.0%	-	-	-	-
妊娠期間短縮、低出生体重に関連する障害	F病院	1,398 11.9%	大阪母子医療センター	1,245 10.6%	K病院	827 7.1%
先天性心疾患	G病院	511 34.2%	大阪母子医療センター	353 23.6%	D病院	264 17.7%
停留精巣	B病院	61 23.4%	大阪母子医療センター	60 23.0%	D病院	58 22.2%
その他の先天異常	H病院	19 40.4%	I病院	18 38.3%	大阪母子医療センター	10 21.3%

④. 南大阪地域では他施設と比較して圧倒的な実績 (2018年度実績)



⑥. 当センターの分娩件数は増加

年度	2018	2019	2020	2021	2022 (見込み)
分娩件数	1,674	1,692	1,693	1,808	1,900

⑦. 小児病院は1床あたりの面積が成人の病院 (約100 m<sup>2</sup>) に比べ大きな面積が必要

施設名	大阪母子医療センター	A 小児病院	B 小児病院	C 小児病院	D 小児病院
稼働病床数	343	239	329	275	316
稼働1床あたり面積	123.1	127.2	135.9	150.4	179.4

⑧. 小児病院ではこどもの健全な発達・発育、教育の機会を保障する様々な設備が必須

